



TITLE:

<大會抄録>唐代即位儀禮の再検討

AUTHOR(S):

金子, 修一

CITATION:

金子, 修一. <大會抄録>唐代即位儀禮の再検討. 東洋史研究 1994, 53(3): 576-576

ISSUE DATE:

1994-12-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154495>

RIGHT:

の詔と、「學明經」と記され明經科に察舉されたと考えられる者の分析を中心として、察舉科目としての明經科の性格を検討したい。

唐代即位儀禮の再検討

金子修一

中國の即位儀禮については、初め西嶋定生氏が、「天子即位—皇帝即位の順で漢代の即位儀禮が構成されていることを示され（漢代における即位儀禮）『中國古代國家と東アジア世界』所収）、次いで尾形勇氏が西嶋氏の所説を敷衍され、唐代までの即位儀禮は基本的に天子即位—皇帝即位の二段階から成っていることを示された（中國の即位儀禮）『東アジア世界における日本古代史講座』九）。

しかるに最近、松浦千春氏は西嶋氏の天子即位の史料解釋を批判され（「漢より唐に至る帝位繼承と皇太子」『歴史』八〇）、さらに唐代の第一段階の即位が天子即位であることを明確に否定された（「唐代後半期の即位儀禮について」『一關工業高等專門學校研究紀要』二八）。また報告者も、唐代の即位儀禮の中心が第二次即位の冊・寶の授受にあることを指摘した（拙稿「唐の太極殿と大明宮」『山梨大學教育學部研究報告』四四）。

残る問題は、先帝存命中の讓位の即位儀禮である。唐代では、先帝の讓位を受けた太宗・玄宗・肅宗に即位時の告天が見られる。また、各王朝の初代の皇帝は、最初に皇帝として告天してから天子を名乗っている。こうした内禪・外禪を問わず見られる讓位の即位の

告天と、先帝の崩御による傳位の即位に天子即位が見られないことは統一的に理解され、傳位の場合にのみ祖靈が介在するものと思ふ。従つて、傳位の第一次即位における皇太子の役割は、葬儀の主宰にあるのであろう。

六朝官人の政治意識

中村圭爾

六朝貴族が現實にしばしば官僚的形態をとることは周知の事實である。一方、六朝貴族がその存在において王朝を前提とせず、自體郷里社會を基盤とした政治社會上の支配者であつたこともよくいわれる。では貴族にとつて、官人であることはいかなる意味をもつか、あるいは、貴族にとつて官僚の地位、ひいては王朝はいかなるものと認識されていたか、ここでの政治意識とはそのような意味でもちいることばであり、この疑問への解答を用意することで中國古代の官僚制支配の意味と、六朝貴族制の一面面をあきらかにしようとするのが本發表の主眼である。

六朝官人には、官僚的存在に一種の嫌惡感、または拒絶感を示すかのようにみえるところがある。例えば、任官要請に應じる表現である「屈」、任官を正當化するために用いられる「親老家貧」という事情、俸祿の散賜という形で現れる俸祿の否定、脱俗隱遁的氣風等々からは、任官が不本意であり、それがやむをざる選擇であつたかのように感じさせられる。官人の職責に關しても、いわゆる俗